

## 長期評価による地震発生確率値の更新について

平成25年2月21日

○地震本部は、毎年、これまでに長期評価を行った主要活断層や海溝型地震を対象として、長期評価による地震発生確率値を更新（確率計算の算定基準日の変更）、公表している。

○今回の更新（H25年1月公表）では、「新たな地震調査研究の推進について」の改訂内容や前回の合同会議の議論等を踏まえ、科学的限界や不確実性等を示す文章を新たに記載（別添※）。

※現在は2月1日版が最新版

### ■記載のポイント

- ・地震発生確率に言及する導入として、日本の置かれている背景等を記載。
- ・一般の方々に理解しやすくすることを意識し、モデルの種類等については言及せず、算定している確率がこういった特性を持つのか、確率について主にこういったことを認識してほしいかを要約。
- ・長々と述べないよう、項目を区切って、ある程度の文量にまとめて記載。

### （参考）「新たな地震調査研究の推進について」（H24年9月6日改訂）

（P5より抜粋）

地震本部の長期評価手法は、今後の調査研究の進展に伴い、最新の知見や観測データを取り込み高度化していくことが期待されるが、科学的限界により常に不確実性や未解明な部分が伴う。現行の長期評価は、主に過去の地震の発生履歴データに基づくものであるため、東北地方太平洋沖地震のような低頻度の地震の評価には限界があったが、その説明は十分にはなされていなかった。

このため、国民や地方公共団体の適切な地震防災・減災対策に貢献することができるよう、地震調査研究の結果や長期評価等を発表する際には、科学的限界があることやこれに伴う誤差、ばらつき等も含めて、情報の受け手側に応じて丁寧に説明をしていくことが重要である。特に、長期評価を発表する際には、長期評価の対象とする地震以外にも、発生確率が不明もしくは小さいが、規模の大きい地震が将来起こり得るという可能性も併せて説明していくことが重要である



平成25年2月1日現在

## 今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧

○長期評価における地震発生確率値について

### 1. はじめに

日本及びその周辺は、非常に地震の多い地域です。時には、兵庫県南部地震（1995年）や東北地方太平洋沖地震（2011年）のように、揺れや津波によって大きな被害を受けてきました。こうした大きな被害をもたらす地震はどこでも起きる可能性があります。現在の地震学では、地震の規模やその発生日時を正確に予測することはできません。

### 2. 地震調査研究推進本部の取組み

地震調査研究推進本部では、「同じ場所で同じような地震がほぼ定期的に繰り返す」という仮定のもとに、大きな被害をもたらす可能性が高い、プレート境界やその付近で起きる地震（海溝型地震）や活断層で起きる地震について地震発生確率値を含む長期評価結果を公表しています。

地震発生確率値は、歴史記録や調査研究等から分かった過去の地震活動記録を統計的に処理し、「今後ある一定期間内に地震が発生する可能性」を確率で表現したものです。

### 3. 地震発生確率値の留意点

○想定した次の地震が起きないかぎり、年数経過とともに地震発生確率値は増加していきます。  
(過去の活動記録が不明なため、年数経過によらず地震発生確率値が変わらない統計処理を行っている場合もあります)

○過去の地震活動の時期や発生間隔は、幅を持って推定せざるを得ない場合が多いため、地震発生確率値は不確定さを含んでいます。また、新たな知見が得られた場合には、地震発生確率値は変わることがあります。

○活断層で起きる地震は、発生間隔が数千年程度と長いため、30年程度の間地震発生確率値は大きな値とはなりません。例えば、兵庫県南部地震の発生直前の確率値を求めてみると0.02~8%でした。地震発生確率値が小さいように見えても、決して地震が発生しないことを意味してはいません。

地震は、発生すれば甚大な被害を及ぼす可能性がありますので、日頃から耐震補強や家具の固定などの対策を講じておくことが重要です。

# 1. 主要活断層帯の長期評価の概要(算定基準日 平成25年(2013年)1月1日)

(陸域・沿岸域の活断層から発生する地震の今後30, 50, 100年以内の地震発生確率等)

九州地域の地域評価の長期評価(2013年2月1日公表)に伴い記載が変わった活断層帯

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
神縄・国府津－松田断層帯	7.5程度	我が国の 主な 活断層の 中では <b>高い</b> グループ に属する	0.2%～16%	0.4%～30%	1%～50%	0.5-1.1	約800年-1,300年 12世紀-14世紀前半
日奈久断層帯(注8) (八代海区間)	7.3程度		ほぼ0%～16%	ほぼ0%～30%	ほぼ0%～50%	0.1-1.5	1,100年-6,400年程度 約1,700年前以後-約900年前以前
糸魚川－静岡構造線断層帯 (牛伏寺断層を含む区間)(注3)(注4)	8程度 (71/2～81/2)		14%	20%	40%	1.2	約1,000年 約1,200年前
中央構造線断層帯(注5) (和泉山脈南縁)	7.6～7.7程度		0.06%～14%	0.1%～20%	0.3%～40%	0.5-1.3	約1,100年-2,300年 7-9世紀
境峠・神谷断層帯 (主部)(注6)	7.6程度		0.02%～13%	0.04%～20%	0.09%～40%	0.5-2より大	約1,800年-5,200年 約4,900年前-2,500年前
阿寺断層帯 (主部/北部)(注4)	6.9程度		6%～11%	10%～20%	20%～30%	1.2-1.9	約1,800年-2,500年 約3,400年前-3,000年前
三浦半島断層群 (主部/武山断層帯)(注4)	6.6程度 もしくはそれ以上		6%～11%	10%～20%	20%～30%	1.0-1.4	1,600年-1,900年程度 約2,300年前-1,900年前
安芸灘断層群 (主部)	7.0程度		0.1%～10%	0.2%～20%	0.4%～30%	0.6-2.4	2,300年-6,400年程度 約5,600年前-3,600年前
山形盆地断層帯 (北部)	7.3程度		0.003%～8%	0.005%～10%	0.01%～20%	0.4-1.6	約2,500年-4,000年 約3,900年前-1,600年前
高田平野断層帯 (高田平野東縁断層帯)(注7)	7.2程度		ほぼ0%～8%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%	0.07-1.5	2,300年程度 約3,500年前-19世紀
警固断層帯 (南東部)	7.2程度		0.3%～6%	0.4%～9%	0.9%～20%	0.6-1.4	約3,100年-5,500年 約4,300年前-3,400年前
砺波平野断層帯・呉羽山断層帯 (砺波平野断層帯東部)	7.0程度		0.04%～6%	0.06%～10%	0.1%～20%	0.5-1.4	3,000年-7,000年程度 約4,300年前-3,600年前
日奈久断層帯(注8) (日奈久区間)	7.5程度		ほぼ0%～6%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%	0.2-2.3	3,600年-11,000年程度 約8,400年前以後-約2,000年前以前
森本・富樫断層帯	7.2程度		ほぼ0%～6%	ほぼ0%～9%	ほぼ0%～20%	0.1-1.0	約2,000年 約2,000年前-200年前
庄内平野東縁断層帯 (南部)	6.9程度		ほぼ0%～6%	ほぼ0%～10%	ほぼ0%～20%	0.05-1.2	約2,500年-4,600年 約3,000年前-18世紀
新庄盆地断層帯 (東部)	7.1程度		5%以下	8%以下	20%以下	1.6以下	4,000年程度 約6,200年前以後
黒松内低地断層帯	7.3程度以上		2%～5% 以下	3%～9% 以下	7%～20% 以下	1.0-1.6以下	3,600年-5,000年程度以上 約5,900年前-4,900年前
楡形山脈断層帯	6.8程度		0.3%～5%	0.6%～8%	1%～20%	0.6-1.1	約2,800年-4,200年 約3,200年前-2,600年前
山崎断層帯 (主部/南東部)	7.3程度		0.03%～5%	0.06%～8%	0.2%～20%	0.5-1.2	3,000年程度 約3,600年前-6世紀
奈良盆地東縁断層帯(注9)	7.4程度		ほぼ0%～5%	ほぼ0%～7%	ほぼ0%～10%	0.2-2.2	約5,000年 約11,000年前-1,200年前
砺波平野断層帯・呉羽山断層帯 (呉羽山断層帯)	7.2程度		ほぼ0%～5%	ほぼ0%～8%	ほぼ0%～20%	0.3-1.2	3,000年-5,000年程度 約3,500年前-7世紀
高山・大原断層帯 (国府断層帯)	7.2程度		ほぼ0%～5%	ほぼ0%～7%	ほぼ0%～10%	0.07-1.3	約3,600年-4,300年 約4,700年前-300年前
中央構造線断層帯(注5) (金剛山地東縁)	6.9程度		ほぼ0%～5%	ほぼ0%～9%	ほぼ0%～20%	0.1-1.0	約2,000年-14,000年 約2,000年前-4世紀
サロベツ断層帯	7.6程度		4%以下	7%以下	10%以下	1.3以下	約4,000年-8,000年 約5,100年前以後
周防灘断層群(注10) (主部)	7.6程度		2%～4%	4%～6%	7%～10%	1.3-1.9	概ね5,800年-7,500年 約11,000年前-10,000年前

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
別府一万年山断層帯 (大分平野-由布院断層帯/西部) <sup>(注11)</sup>	6.7程度	我が国の 主な 活断層の 中では <b>高い</b> グループ に属する	2%~4%	3%~7%	6%~10%	-	約700年-1,700年 約2,000年前以後-18世紀初頭以前に2回
別府一万年山断層帯 (大分平野-由布院断層帯/東部)	7.2程度		0.03%~4%	0.06%~7%	0.2%~10%	0.5-1.0	約2,300年-3,000年 約2,200年前以後-6世紀以前
雲仙断層群 (南西部/北部)	7.3程度		ほぼ0%~4%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%	0.2-1.0	約2,500年-4,700年 約2,400年前-11世紀以前
木曾山脈西縁断層帯 (主部/南部)	6.3程度		ほぼ0%~4%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%	0.2-1.4	約4,500年-24,000年 約6,500年前-3,800年前
上町断層帯	7.5程度		2%~3%	3%~5%	6%~10%	1.1-2より大	8,000年程度 約28,000年前-9,000年前
琵琶湖西岸断層帯 (北部) <sup>(注12)</sup>	7.1程度		1%~3%	2%~5%	4%~10%	-	約1,000年-2,800年 約2,800年前-約2,400年前
三浦半島断層群 (主部/衣笠・北武断層帯) <sup>(注4)</sup>	6.7程度 もしくはそれ以上		ほぼ0%~3%	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~10%	0.3-0.8	1,900年-4,900年程度 6-7世紀
十日町断層帯 (西部)	7.4程度		3%以上	5%以上	10%以上	0.9以上	3,300年程度 約3,100年前以前
別府一万年山断層帯 (野稻岳-万年山断層帯)	7.3程度	我が国の 主な 活断層の 中では <b>やや高い</b> グループ に属する	ほぼ0%~3% (最大2.6%)	ほぼ0%~4%	0.001%~9%	0.4-1.0	4,000年程度 約3,900年前以後-6世紀以前
砺波平野断層帯・呉羽山断層帯 (砺波平野断層帯西部)	7.2程度		ほぼ0%~2% もしくはそれ以上	ほぼ0%~4% もしくはそれ以上	ほぼ0%~8% もしくはそれ以上	0.2-1.2	約6,000年-12,000年 約6,900年前-1世紀 もしくはそれ以下
邑知潟断層帯 <sup>(注13)</sup>	7.6程度		2%	3%~4%	5%~8%	-	1,200年-1,900年程度 約3,200年前-9世紀
長岡平野西縁断層帯	8.0程度		2%以下	4%以下	9%以下	0.7以下	約1,200年-3,700年 13世紀以後
北由利断層	7.3程度		2%以下	3%以下	6%以下	0.8以下	3,400-4,000年程度 約2,800年前以後
立川断層帯 <sup>(注4)</sup>	7.4程度		0.5%~2%	0.8%~4%	2%~7%	0.9-2.0	10,000年-15,000年程度 約20,000年前-13,000年前
岩国断層帯	7.6程度		0.03%~2%	0.05%~3%	0.1%~6%	0.6-1.2	約9000年-18000年 約11,000年前-10,000年前
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (恵那山-猿投山北断層帯)	7.7程度		ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%	0.001%~6%	0.4-1.1	約7,200年-14,000年 約7,600年前-5,400年前
当別断層	7.0程度		ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	ほぼ0%~8%	0.1-1.5	7,500年-15,000年程度 約11,000年前-2,200年前
曾根丘陵断層帯 <sup>(注14)</sup>	7.3程度		1%	2%	3%~5%	-	概ね2,000年-3,000年 約10,000年前以後
山形盆地断層帯 (南部) <sup>(注15)</sup>	7.3程度		1%	2%	4%	不明	2,500年程度 不明
人吉盆地南縁断層	7.1程度		1%以下	2%以下	4%以下	0.9以下	約8,000年以上 約7,300年前以後-3,200年前以前
頓宮断層	7.3程度		1%以下	2%以下	4%以下	1.0以下	約10,000年以上 約10,000年前-7世紀
長町-利府線断層帯 <sup>(注16)</sup>	7.0~7.5程度		1%以下	2%以下	3%以下	-	3,000年程度以上 約16,000年前以後

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
花輪東断層帯(注15)	7.0程度	我が国の 主な 活断層の 中では やや高い グループ に属する	0.6%~1%	1%~2%	2%~3%	不明	3,000年-5,000年程度 約15,000年前以後
青森湾西岸断層帯(注15)	7.3程度		0.5%~1%	0.8%~2%	2%~3%	不明	3,000年-6,000年程度 不明
雲仙断層群 (南西部/南部)(注17)	7.1程度		0.5%~1%	0.8%~2%	2%~5%	-	約2,100年-6,500年 約4,500年前以後-16世紀以前
山崎断層帯 (主部/北西部)	7.7程度		0.09%~1%	0.2%~2%	0.4%~4%	0.5-0.6	約1,800年-2,300年 868年播磨国地震
中央構造線断層帯(注5) (紀淡海峡-鳴門海峡)	7.7程度		0.005%~1%	0.009%~2%	0.02%~4%	0.4-0.8	約4,000年-6,000年 約3,100年前-2,600年前
六甲・淡路島断層帯 (主部/六甲山地南縁-淡路島東岸区間)	7.9程度		ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~6%	0.1-0.6	900年-2,800年程度 16世紀
函館平野西縁断層帯	7.0~7.5程度		ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%	0.02-1.1	13,000年-17,000年 14,000年前以後
布引山地東縁断層帯 (西部)	7.4程度		ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	0.02-1.6	17,000年程度 約28,000年前-400年前
月岡断層帯	7.3程度		ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%	0.1以下-0.9	7,500年以上 約6,500年-900年前
出水断層帯	7.0程度		ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	0.3-0.9	概ね8,000年 約7,300年前以後-2,400年前以前
六日町断層帯 (北部)(ケース1)(注18)	7.1程度		0.4%~0.9%	0.7%~2%	1%~3%	-	約3,200年-7,600年 約4,900年前-16世紀
伊勢湾断層帯 (白子-野間断層)	7.0程度		0.2%~0.8%	0.3%~1%	0.7%~3%	0.6-0.8	8,000年程度 概ね6,500年前-5,000年前
三峠・京都西山断層帯 (京都西山断層帯)	7.5程度		ほぼ0%~0.8%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~3%	0.3-0.7	約3,500年-5,600年 約2,400年前-2世紀
布田川断層帯(注8) (布田川区間)	7.0程度		ほぼ0%~0.9%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~3%	0.08-0.9	8,100年-26,000年程度 約6,900年前以後-約2,200年前以前
高山・大原断層帯 (高山断層帯)(注15)	7.6程度		0.7%	1%	2%	不明	4,000年程度 不明
十日町断層帯 (東部)(注15)	7.0程度		0.4%~0.7%	0.6%~1%	1%~2%	不明	4,000年-8,000年程度 不明(注19)
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (屏風山断層帯)(注15)	6.8程度		0.2%~0.7%	0.4%~1%	0.8%~2%	不明	4,000年-12,000年程度 不明
養老-桑名-四日市断層帯	8程度		ほぼ0%~0.7%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~3%	0.2-0.6	1,400年-1,900年 13-16世紀
新庄盆地断層帯 (西部)(注15)	6.9程度		0.6%	1%	2%	不明	4,700年程度 不明
増毛山地東縁断層帯・沼田-砂川付近の断層帯 (増毛山地東縁断層帯)(注15)	7.8程度		0.6%以下	1%以下	2%以下	不明	5,000年程度以上 不明
三方・花折断層帯 (花折断層帯/中南部)	7.3程度		ほぼ0%~0.6%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	0.2-0.7	4,200年-6,500年 2,800年前-6世紀
三峠・京都西山断層帯 (三峠断層帯)(注15)	7.2程度		0.4%~0.6%	0.7%~1%	1%~2%	不明	5,000年-7,000年程度 3世紀以前
魚津断層帯(注15)	7.3程度		0.4%以上	0.6%以上	1%以上	不明	8,000年程度以下 不明
十勝平野断層帯 (光地園断層帯)(注20)	7.2程度		0.1%~0.4%	0.2%~0.7%	0.5%~1%	-	7,000年-21,000年程度 約21,000年前以後に2回
中央構造線断層帯(注5) (讃岐山脈南縁-石鎚山脈北縁東部)	8.0程度 もしくはそれ以上		ほぼ0%~0.3%	ほぼ0%~0.7%	ほぼ0%~2%	0.3-0.5	約1,000年-1,600年 16世紀
中央構造線断層帯(注5) (石鎚山脈北縁)	7.3-8.0程度		ほぼ0%~0.3%	ほぼ0%~0.7%	ほぼ0%~2%	0.2-0.5	約1,000年-2,500年 16世紀

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュー ド)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
中央構造線断層帯 <sup>(注5)</sup> (石鎚山脈北縁西部-伊予灘)	8.0程度 もしくはそれ以上	我が国の 主な 活断層の 中では やや高い グループ に属する	ほぼ0%~0.3%	ほぼ0%~0.7%	ほぼ0%~2%	0.1-0.5	約1,000年-2,900年 16世紀
十勝平野断層帯 (主部) <sup>(注15)</sup>	8.0程度		0.1%~0.2%	0.2%~0.3%	0.5%~0.6%	不明	17,000年-22,000年程度 不明
石狩低地東縁断層帯 (南部) <sup>(注15)</sup>	7.7程度以上		0.2%以下	0.3%以下	0.6%以下	不明	17,000年程度以上 不明
鈴鹿西縁断層帯 <sup>(注15)</sup>	7.6程度		0.08%~0.2%	0.1%~0.3%	0.3%~0.6%	不明	約18,000年-36,000年 不明
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (加木屋断層帯) <sup>(注15)</sup>	7.4程度		0.1%	0.2%	0.3%	不明	30,000年程度 不明
山崎断層帯 (那岐山断層帯) <sup>(注15)</sup>	7.3程度		0.07%~0.1%	0.1%~0.2%	0.2%~0.3%	不明	約30,000年-40,000年 不明
生駒断層帯	7.0~7.5程度		ほぼ0%~0.1%	ほぼ0%~0.3%	ほぼ0%~0.6%	0.2-0.5	3,000年-6,000年 1,600年前-1,000年前頃
福井平野東縁断層帯 (主部)	7.6程度	我が国の 主な 活断層の 中では やや高い グループ に属する	ほぼ0%~ 0.07%	ほぼ0%~0.1%	ほぼ0%~0.3%	0.3-0.5	約6,300年-10,000年 約3,400年前-2,900年前
鈴鹿東縁断層帯	7.5程度		ほぼ0%~ 0.07%	ほぼ0%~0.1%	ほぼ0%~0.2%	0.2-0.5	約6,500年-12,000年 約3,500年前-2,800年前
別府-万年山断層帯 (別府湾-日出生断層帯/西部)	7.3程度		ほぼ0%~ 0.05%	ほぼ0%~ 0.08%	ほぼ0%~ 0.2%	0.06-0.6	13,000年-25,000年程度 約7,300年前以後-6世紀以前
有馬-高槻断層帯 (7.5±0.5)	7.5程度		ほぼ0%~ 0.03%	ほぼ0%~ 0.07%	ほぼ0%~0.3%	0.2-0.4	1,000年-2,000年程度 1596年慶長伏見地震
富良野断層帯 (西部)	7.2程度		ほぼ0%~ 0.03%	ほぼ0%~ 0.05%	ほぼ0%~0.1%	0.07-0.5	4,000年程度 2世紀-1739年
長井盆地西縁断層帯	7.7程度		0.02%以下	0.04%以下	0.1%以下	0.5以下	5,000年-6,300年程度 約2,400年前以後
会津盆地西縁・東縁断層帯 (会津盆地東縁断層帯)	7.7程度		ほぼ0%~ 0.02%	ほぼ0%~ 0.03%	ほぼ0%~ 0.07%	0.3-0.5	約6,300年-9,300年 約3,000年前-2,600年前
六日町断層帯 (南部)	7.3程度		ほぼ0%~ 0.01%	ほぼ0%~ 0.02%	ほぼ0%~ 0.05%	0.3-0.5	約6,200年-7,200年 約2,900年前-2,000年前
富良野断層帯 (東部)	7.2程度		ほぼ0%~ 0.01%	ほぼ0%~ 0.02%	ほぼ0%~ 0.05%	0.1-0.5	9,000年-22,000年程度 約4,300年前-2,400年前
関東平野北西縁断層帯 (主部)	8.0程度		ほぼ0%~ 0.008%	ほぼ0%~ 0.01%	ほぼ0%~ 0.03%	0.08-0.5	13,000年-30,000年程度 約6,200年前-2,500年前
大阪湾断層帯	7.5程度		0.004%以下	0.007%以下	0.02%以下	0.4以下	約3,000年-7,000年 9世紀以後
伊勢原断層	7.0程度		ほぼ0%~ 0.003%	ほぼ0%~ 0.005%	ほぼ0%~ 0.01%	0.05-0.4	4,000年-6,000年程度 5世紀-18世紀初頭
伊勢湾断層帯 (主部/南部)	6.9程度		ほぼ0%~ 0.002%	ほぼ0%~ 0.004%	ほぼ0%~ 0.009%	0.2-0.4	5,000年-10,000年程度 概ね2,000年前-1,500年前
布引山地東縁断層帯 (東部)	7.6程度		0.001%	0.002%	0.005%	0.4	25,000年程度 11,000年前頃
野坂・集福寺断層帯 (野坂断層帯)	7.3程度		ほぼ0% もしくはそれ以上	ほぼ0% もしくはそれ以上	ほぼ0% もしくはそれ以上	0.04-0.1 もしくはそれ以上	約5,600年-7,600年 15-17世紀
伊那谷断層帯 (主部) <sup>(注21)</sup>	8.0程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05-0.1	約5,200年-6,400年 14-18世紀
石狩低地東縁断層帯 (主部)	7.9程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%~ 0.001%	0.06-0.3	1,000年-2,000年程度 1739年-1885年

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
跡津川断層帯	7.9程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06-0.07	約2,300年-2,700年 1858年飛越地震
庄川断層帯	7.9程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06-0.3	約3,600年-6,900年 11-16世紀
北上低地西縁断層帯	7.8程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	16,000年-26,000年 4,500年前頃
阿寺断層帯 (主部/南部)	7.8程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.3	約1,700年 1586年天正地震
福島盆地西縁断層帯	7.8程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	8,000年程度 約2,200年前-3世紀
長野盆地西縁断層帯(注22)	7.4~7.8程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.07-0.2	800年-2,500年 1847年善光寺地震
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (猿投-高浜断層帯)	7.7程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.4	40,000年程度 約14,000年前頃
牛首断層帯	7.7程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	約5,000年-7,100年 11-12世紀
別府-万年山断層帯 (別府湾-日出断層帯/東部)	7.6程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%~ 0.005%	0.2-0.3	約1,300年-1,700年 1596年慶長豊後地震
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯 (主部/北部)	7.6程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	約2,300年-2,700年 17世紀頃
関谷断層	7.5程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.08-0.3	約2,600年-4,100年 14-17世紀
琵琶湖西岸断層帯 (南部)	7.5程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	約4,500年-6,000年 1185年の地震
木曾山脈西縁断層帯 (主部/北部)	7.5程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.08-0.1	約6,400-9,100年 13世紀頃
双葉断層(注4)	6.8-7.5程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	8,000年-12,000年程度 約2400年前-2世紀
山田断層帯 (郷村断層帯)	7.4程度 もしくはそれ以上		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.006-0.009	約10,000年-15,000年 1927年北丹後地震
別府-万年山断層帯 (崩平山-亀石山断層帯)	7.4程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2以下	約4,300年-7,300年 13世紀以後
濃尾断層帯 (主部/梅原断層帯)	7.4程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.008-0.009	約14,000年-15,000年 1891年濃尾地震
会津盆地西縁・東縁断層帯 (会津盆地西縁断層帯)	7.4程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.05	約7,400年-9,700年 1611年会津地震
高田平野断層帯 (高田平野西縁断層帯)	7.3程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05-0.1	2,200年-4,800年程度 1751年の地震
北伊豆断層帯	7.3程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06	約1,400年-1,500年 1930年北伊豆地震
濃尾断層帯 (主部/根尾谷断層帯)	7.3程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.03-0.06	約2,100年-3,600年 1891年濃尾地震
木津川断層帯	7.3程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.006-0.04	約4,000年-25,000年 1854年伊賀上野地震
水縄断層帯	7.2程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1	14,000年程度 679年筑紫地震
横手盆地東縁断層帯 (北部)	7.2程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.03	3,400年程度 1896年陸羽地震



断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
湖北山地断層帯 (北西部)	7.2程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%～ 0.001%	0.2-0.3	約3,000年-4,000年 11-14世紀
三方・花折断層帯 (三方断層帯)	7.2程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06-0.09	約3,800年-6,300年 1662年の地震
伊勢湾断層帯 (主部/北部)	7.2程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.03-0.1	10,000年-15,000年程度 概ね1000年前-500年前
能代断層帯	7.1程度以上		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	1,900年-2,900年程度 1694年能代地震
六甲・淡路島断層帯 (主部/淡路島西岸区間)	7.1程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.007-0.01	1,800年-2,500年程度 1995年兵庫県南部地震
長尾断層帯	7.1程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.01-0.04	概ね30,000年程度 9-16世紀
庄内平野東縁断層帯 (北部)	7.1程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.08-0.1 もしくはそれ以上	1,000年-1,500年程度 1894年庄内地震
六日町断層帯 (北部)(ケース2)(注18)	7.1程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.002-0.003 もしくはそれ以上	約3,200-4,000年 2004年中越地震
磐石盆地西縁-真昼山地東縁断層帯 (真昼山地東縁断層帯/北部)	6.7-7.0程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.004-0.02	約6,300年-31,000年 1896年陸羽地震
湖北山地断層帯 (南東部)	6.8程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.09	概ね7,000年程度 15-17世紀
濃尾断層帯 (温見断層/北西部)	6.8程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05-0.06	約2,200年-2,400年 1891年濃尾地震
山崎断層帯 (草谷断層)	6.7程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	5,000年程度 5-12世紀
六甲・淡路島断層帯 (先山断層帯)	6.6程度		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.2	5,000年-10,000年程度 11世紀-17世紀初頭
標津断層帯	7.7程度以上		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 不明
菊川断層帯	7.6程度 もしくはそれ以上		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 約8,500年前-2,100年前
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯 (主部/南部)	7.6程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 約4,900年前-15世紀
西山断層帯(注32) (西山区間)	7.6程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 約13,000年前以後-概ね2,000年前以前
西山断層帯(注32) (大島沖区間)	7.5程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 約20,000年前以後
増毛山地東縁断層帯・沼田-砂川付近の断層帯 (沼田-砂川付近の断層帯)	7.5程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 不明
木曾山脈西縁断層帯 (清内路峠断層帯)	7.4程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 不明
山田断層帯 (主部)	7.4程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 約3,300年前以前
安芸灘断層群 (広島湾-岩国沖断層帯)	7.4程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 不明
雲仙断層群 (北部)(注24)	7.3程度以上		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 約5,000年前以後
西山断層帯(注32) (嘉麻峠区間)	7.3程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 不明
伊那谷断層帯 (南東部)	7.3程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 不明
濃尾断層帯 (武儀川断層)	7.3程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明 不明

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュー ド)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
長良川上流断層帯	7.3程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
阿寺断層帯 (白川断層帯)	7.3程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
横手盆地東縁断層帯 (南部)	7.3程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
津軽山地西縁断層帯 <sup>(注25)</sup> (南部)	7.1-7.3程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
津軽山地西縁断層帯 <sup>(注25)</sup> (北部)	6.8-7.3程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
宮古島断層帯 (中部)	7.2程度以上		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
布田川断層帯 <sup>(注8)</sup> (宇土半島北岸区間)	7.2程度以上		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
鴨川低地断層帯 <sup>(注26)</sup>	7.2程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
境峠・神谷断層帯 (霧訪山-奈良井断層帯)	7.2程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
阿寺断層帯 (佐見断層帯)	7.2程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯 (浦底-柳ヶ瀬山断層帯)	7.2程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
三方・花折断層帯 (花折断層帯/北部) <sup>(注27)</sup>	7.2程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
三峠・京都西山断層帯 (上林川断層)	7.2程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
周防灘断層群 <sup>(注10)</sup> (秋穂沖断層帯)	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
周防灘断層群 <sup>(注10)</sup> (宇部南方沖断層帯)	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
福井平野東縁断層帯 (西部) <sup>(注28)</sup>	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
濃尾断層帯 (揖斐川断層帯)	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
雲仙断層群 (南東部) <sup>(注24)</sup>	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
屏風山・恵那山-猿投山断層帯 (赤河断層帯)	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
関東平野北西縁断層帯 (平井-櫛挽断層帯)	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
高山・大原断層帯 (猪之鼻断層帯)	7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明
雫石盆地西縁-真昼山地東縁断層帯 (真昼山地東縁断層帯/南部)	6.9-7.1程度		不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明 <sup>(注23)</sup>	不明

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
濃尾断層帯 (温見断層/南東部)	7.0程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
濃尾断層帯 (主部/三田洞断層帯)	7.0程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
五日市断層帯 (五日市断層)	7.0程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
警固断層帯 (北西部)(注29)	7.0程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
布田川断層帯(注8) (宇土区間)	7.0程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
宮古島断層帯 (西部)	6.9程度以上		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
雫石盆地西縁-真昼山地東縁断層帯 (雫石盆地西縁断層帯)	6.9程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
日奈久断層帯(注8) (高野-白旗区間)	6.8程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯 (主部/中部)	6.6程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
五日市断層帯 (己斐-広島西縁断層帯)	6.5程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
野坂・集福寺断層帯 (集福寺断層)	6.5程度		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
三浦半島断層群 (南部)	6.1程度 もしくはそれ以上		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
折爪断層(注30)	(最大7.6程度)		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
元荒川断層帯	上尾市付近を境に北部と南部に分けられ、北部のみが活断層と判断される。						
東京湾北縁断層	活断層ではないと判断される。						
岐阜-一宮断層帯	活断層ではないと判断される。						
荒川断層	活断層ではないと判断される。						
幌延断層帯	活断層ではないと判断される。						

(参考) 富士川河口断層帯の長期評価の概要 (算定基準日 平成25年(2013年)1月1日) (注31)

(駿河トラフで発生した海溝型地震に伴って活動したと考える場合の地震発生確率等)

断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の 主な 活断層に おける 相対的評価	地震発生確率 (注1)			地震後 経過率 (注2)	平均活動間隔
			30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
富士川河口断層帯 (ケースa)	8.0程度	我が国の主な活断層の中では高いグループに属する	10%~18%	20%~30%	30%~50%	0.9-2より大	約150年-300年
富士川河口断層帯 (ケースb)	8.0程度		2%~11% 以下	3%~20% 以下	7%~30% 以下	0.7-1.2 以下	約1,300年-1,600年
							6-9世紀

注1: 確率値は有効数字1桁で記述している。ただし、30年確率が10%台の場合は2桁で記述する。また「ほぼ0%」とあるのは、 $10^{-3}$ %未満の確率値を表す。

注2: 最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

注3: 「地震に関する基盤的調査観測計画」(地震調査研究推進本部, 1997)による全国の主要活断層帯の区分では、糸魚川-静岡構造線断層帯は北部、中部、南部の3つに分けられている。牛伏寺断層は中部の一部であり、長期評価では「牛伏寺断層を含む区間」がどこまでか判断できないとしている。なお、最新活動時(1200年前)には、北部と中部が同時に活動した。

注4: 平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震に伴い、糸魚川-静岡構造線断層帯(中部1牛伏寺断層)、立川断層帯、双葉断層、三浦半島断層群、阿寺断層帯(主部/北部(萩原断層))では、地震発生確率が表の値より高くなっている可能性がある。

注5: 中央構造線断層帯は、6つに分かれて活動すると評価されており、上表にはそれぞれの数値を示した。しかし、これらは1つの断層帯として同時に活動する可能性もある。その場合はマグニチュード8.0程度もしくはそれ以上の地震が発生し、その長期確率は、6つの区間が個別に活動する長期確率を超えることはないとは評価されている。

注6: 境峠・神谷断層帯(主部)は、最新活動時期を約4千9百年前以後-約2千5百年前以前、1つ前の活動を約7千7百年前以後-約6千7百年前以前の可能性があるとし、これら過去2回の活動の間隔を基に平均活動間隔(約1千8百-5千2百年)を求めている。ただし、最新活動時期の年代幅が大きく、またそのため、平均活動間隔に関しても十分に時期を絞り込むことができなかった。したがって、これらの値から算出した地震後経過率(0.5-2.7)及び将来の地震発生確率(今後30年: 0.02%-13%)は、いずれも大きく幅を持たせた評価となっていることに留意する必要がある。

- 注7： 高田平野断層帯（高田平野東縁断層帯）の最新活動時期は、約3500年前以後、19世紀以前と推定されている。19世紀以前であることは、1847年の地震以降に本断層帯付近で大きな被害地震が起こっていないことに基づいていることから、最新活動時期を3500年前以後、西暦1847年以前として地震発生確率を算出している。
- 注8： 布田川断層帯及び日奈久断層帯については、これまで布田川・日奈久断層帯として、北東部・中部・南部に3区分して評価を行っていた（地震調査研究推進本部地震調査委員会、2002）。地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013a）は、その後に得られた新たな知見に基づき、布田川断層帯と日奈久断層帯に二分し、さらに布田川断層帯を布田川区間・宇土区間・宇土半島北岸区間、日奈久断層帯を高野一白旗区間・日奈久区間・八代海区間に区分して評価を行った。
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会（2002）：「布田川・日奈久断層帯の評価」、35p。  
地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013a）：「布田川断層帯・日奈久断層帯の評価（一部改訂）」、62p。
- 注9： 京都盆地一奈良盆地断層帯南部は、評価の結果、奈良盆地東縁断層帯と称することとしたので、ここでは奈良盆地東縁断層帯と記述した。
- 注10： 宇部沖断層群は、評価の結果、周防灘断層群と称することとしたので、ここでは周防灘断層群と記述した。
- 注11： 別府一万年山断層帯（大分平野一由布院断層帯/西部）は、最新活動時期が十分絞り込まれておらず、通常的手法では平均活動間隔を求めることができない。ここでは、過去の活動時期から、約2000年前～18世紀に2回の活動があったとして平均活動間隔を求めている。また、地震発生確率の計算に際しては、通常のBPT分布を用いることができるだけの信頼度がないと考えて、ポアソン過程で求めた。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注12： 琵琶湖西岸断層帯（北部）は、最新活動時期は約2800年前以後、約2400年前以前と求められているが、平均活動間隔約1000年～2800年と比較して最新活動時期からの経過時間が長くなる可能性が考えられる。そのため、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求められない。なお、通常のBPT分布を用いた場合、30年確率のとり得る範囲は3%～20%、地震後経過率は0.9～2.8となる。また、この評価とは別に、琵琶湖西岸断層帯（北部）の最新活動時期を7世紀中葉以降とする考えもある。この考えに従うと、平均活動間隔が大幅に短くなり、将来の地震発生確率も今後30年以内、50年以内、100年以内の地震発生確率は、それぞれ2%～6%、4%～10%、7%～20%と幅がさらに大きくなり、最大値が大きくなることに注意が必要である。
- 注13： 邑知潟断層帯は、最新活動時期が十分絞り込まれておらず、通常的手法では平均活動間隔を求めることができない。そこで、過去の活動時期から、約4900年前～9世紀に3回の活動があったとして平均活動間隔を求めている。また、地震発生確率の計算に際しては、通常のBPT分布を用いることができるだけの信頼度がないと考えて、ポアソン過程で求めた。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注14： 曾根丘陵断層帯は、最新活動時期が約10000年前以後と求められているが、平均活動間隔2000～3000年に対して十分に絞り込まれていない。このため、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。
- 注15： 最新活動の時期が特定できていないため、通常の活断層評価で用いている計算方法（地震の発生確率が時間とともに変動するモデル：BPT分布モデル）ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方（ポアソン過程）により長期確率を求めている。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注16： 長町一利府線断層帯は、最新活動時期が約16000年前以後と求められているが、平均活動間隔3000年に対して十分に絞り込まれていない。このため、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。
- 注17： 雲仙断層群（南西部/南部）は、最新活動時期が約4500年前～16世紀と求められているが、平均活動間隔2100～6500年に対して十分に絞り込まれていない。このため、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。
- 注18： 六日町断層帯（北部）については、平成16年（2004年）新潟県中越地震を最新活動としない場合（ケース1）とこれを最新活動とする場合（ケース2）の2つの場合分けをして、評価を行った。
- 注19： 十日町断層帯（東部）では、約3800～3200年前に活動した可能性があるが、これを最新活動と限定できなかったことから、不明としている。そのため、地震後経過率を求められない。
- 注20： 十勝平野断層帯（光地断層）は、最新活動時期が十分絞り込まれておらず、通常的手法では平均活動間隔を求めることができない。ここでは、過去の活動時期から、約21000年前以後に2回の活動があったとして平均活動間隔を求めている。また、地震発生確率の計算に際しては、通常のBPT分布を用いることができるだけの信頼度がないと考えて、ポアソン過程で求めた。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注21： 伊那谷断層帯（主部）の最新活動時期は、14世紀以後、18世紀以前と推定されている。18世紀以前であることは、1725年の高遠の地震以降に本断層帯付近で大きな被害地震が起こっていないことに基づいていることから、最新活動時期を西暦1300年以後、西暦1725年以前として地震発生確率を算出している。
- 注22： 信濃川断層帯は、評価の結果、長野盆地西縁断層帯と称することとしたので、ここでは長野盆地西縁断層帯と記述した。
- 注23： 平均活動間隔が判明していないため、地震発生確率及び地震後経過率を求めることができない。
- 注24： 雲仙断層群（北部、南東部）は、平均活動間隔が求められていないため、地震発生確率は不明となっている。しかし、信頼度が低い情報ながら、これらの断層帯における平均変位速度は1m/千年程度に達する可能性が指摘されている。このため、これらの断層帯においては平均活動間隔が最新活動時期からの経過時間よりも短い可能性もあり得るため、注意が必要である。
- 注25： 津軽山地西縁断層帯は、北部及び南部に分かれると評価されている。平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が1766年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。なお、最新活動と考えられる地震の規模が断層帯の長さ比べて大きいと、発生する地震の規模は幅を持った値としている。
- 注26： 鴨川低地断層帯に関しては、活断層であるかどうかの確実な証拠に乏しく、活断層としての存在そのものについて疑問視した調査結果も報告されている。よって、今後、本断層帯の活動時期や活動性に関する確実な資料を得る必要がある。
- 注27： 三方・花折断層帯（花折断層帯/北部）は、平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が1662年の地震である可能性があることから、近い将来の地震発生可能性は小さいと考えられる。
- 注28： 福井平野東縁断層帯（西部）は、平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が1948年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。
- 注29： 警固断層帯（北西部）は、平均活動間隔などが不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が2005年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。なお、断層面の位置・形状や活動履歴の検討をするための地形学・地質学的な資料が得られていないことから、長期評価は主に地震観測結果などの地球物理学的な資料に基づいて行った。
- 注30： 折爪断層は、将来の活動可能性を明確にするために必要な資料が十分得られていない。鮮新世の地層を大きく変位させているので、第四紀に活動した断層であることはほぼ確かであると考えられているが、第四紀後期に活動を繰り返していることを示す確かな証拠はこれまで発見されておらず、特に、北部の辰ノ口拗曲においては第四紀後期の活動性は衰えている可能性もある。このため、発生する可能性がある地震の規模についても、便宜的に最大値を記載しているものの、この値は断層全体が一つの区間として活動した場合の試算値に過ぎないことに注意する必要がある。

注31： 富士川河口断層帯については、駿河トラフで発生した海溝型地震に伴って活動してきたと考えられる。そのため、他の活断層の評価と一概に比較できないことから、別途、参考として記載した。富士川河口断層帯については、その過去の活動時期などについて、2つの可能性が考えられることから、2つのケースに分けて評価している。ケースaの場合、富士川河口断層帯は駿河トラフで発生する海溝型地震と連動して同時に活動し、活動の際には浮島ヶ原地区で沈水現象が生じると考えられる、と評価した。また、ケースbの場合、浮島ヶ原地区で認められた沈水現象については、富士川河口断層帯の活動を伴わない海溝型地震の履歴を表している可能性があり、富士川河口断層帯の過去の活動時期は、断層近傍の地表で変位が生じた時期に基づいて推定するべきであるとして評価した。いずれのケースであっても、発生する地震の規模は、駿河トラフで発生する海溝型地震と連動して同時に活動する場合の規模を推定している。なお、富士川河口断層帯の陸上部で認められている断層が単独で活動する可能性もあり、その場合、マグニチュード7.2程度の地震が発生する可能性がある。

また、将来確率について、ケースaの場合、最新活動時期からの経過時間が平均活動間隔の2倍を超えているため、通常の活断層評価で用いている計算方法（地震の発生確率が時間とともに変動するモデル：BPT分布モデル）ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方（ポアソン過程）により長期確率を求めている。なお、活断層の相対的評価については、他の活断層帯と比較した際に今回評価した地震発生確率をそのまま当てはめた場合にはどうなるかを参考までに示したということに留意されたい。

注32： 西山断層帯については、これまで単一の活動区間として評価を行っていた（地震調査研究推進本部地震調査委員会，2004）。その後、同断層帯延長部の分布及び活動履歴に関する新たな知見に基づき、大島沖区間・西山区間・嘉麻峠区間の3区間に区分して評価を行った（地震調査研究推進本部地震調査委員会，2013b）。

地震調査研究推進本部地震調査委員会（2004）：「西山断層帯の評価」，11p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会（2013b）：「西山断層帯の評価（一部改訂）」，33p.

## 2. 海溝型地震の長期評価の概要（算定基準日 平成25年(2013年)1月1日）

（海溝型地震の今後10, 30, 50年以内の地震発生確率）

領域または地震名	長期評価で予想した地震規模（マグニチュード）		地震発生確率 <sup>(注1)</sup>			地震後経過率 <sup>(注2)</sup>	平均発生間隔 <sup>(注1)</sup> (上段)	
			10年以内	30年以内	50年以内		最新発生時期 (下段：ボアソン過程を適用したものを除く)	
南海トラフの地震※ (注13)	南海地震	8.4前後	20%程度	60%程度	90%程度	0.73	114.0年（次回までの標準的な値 <sup>(注3)</sup> 90.1年）	
		同時 8.5前後					66.0年前	
	東南海地震	8.1前後	20%程度	70%～80% <sup>***</sup>	90%程度 もしくは それ以上	0.79	111.6年（次回までの標準的な値 <sup>(注3)</sup> 86.4年）	
							68.1年前	
<p>※地震調査研究推進本部では、現在、南海トラフの地震活動の長期評価作業を進めており、平成25年3月末頃を目処に、その結果をとりまとめ、公表する予定です。上記の南海地震および東南海地震の地震発生確率値は、その公表がなされるまでの参考値として、これまでの算定方法を用いて、算定基準日を2013年1月1日として仮に計算を行った値を掲載しております。</p> <p>※※地震発生確率には不確定さが含まれていることを考慮し、計算結果を四捨五入しています。東南海地震の「30年以内の地震発生確率」は10%程度の単位で表記しています。今回、2013年1月1日を算定基準日とした計算した結果は、確率値が大きく上昇したようにみえますが、経年により値がわずかに大きくなったことに伴う表記上のものです。</p>								
三陸沖から房総沖にかけての地震（第二版）	平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震の発生に伴い、その震源域である、三陸沖中部、宮城県沖、三陸沖南部海溝寄り、福島県沖、茨城県沖、三陸沖北部から房総沖の海溝寄りの一部（三陸沖中部から三陸沖南部海溝寄りに至る領域の海溝寄りの部分）では今後もM7を超える余震が発生する可能性がある。							
	東北地方太平洋沖型		Mw8.4～9.0	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.00	600年程度 1.8年前
	房三陸沖の北海道溝か寄り (注4)	津波地震 <sup>(注5)</sup>	Mt8.6～9.0前後 <sup>(注6)</sup>	9%程度 (2%程度)*	30%程度 (7%程度)*	40%程度 (10%程度)*	—	103年 (412年)* * () は特定海域での値
		正断層型	8.2前後 Mt8.3前後	1%～2% (0.3%～0.6%)*	4%～7% (1%～2%)*	6%～10% (2%～3%)*	—	400年～750年 (1600年～3000年)* * () は特定海域での値
	三陸沖北部 <sup>(注4)</sup>		8.0前後 Mt8.2前後	ほぼ0% ～0.9%	1%～20%	40%～50%	0.46	約97.0年 44.6年前
	繰り返し発生する地震以外の地震		7.1～7.6	50%程度	90%程度	90%程度以上	—	約14.1年 —
	三陸沖中部 <sup>(注7)</sup>		—	—	—	—	—	—
	宮城県沖		7.4前後	不明 <sup>(注8)</sup>	不明 <sup>(注8)</sup>	不明 <sup>(注8)</sup>	不明 <sup>(注8)</sup>	—
	繰り返し発生する地震以外の地震		7.0～7.3	30%程度	60%程度	80%程度	—	約31.8年 —
	三陸沖南部海溝寄り		7.9程度	ほぼ0%	ほぼ0%	0.004%～0.1%	0.02	約109年 1.8年前
	繰り返し発生する地震以外の地震		7.2～7.6	20%程度	50%程度	70%程度	—	約42.3年 —
	福島県沖		7.4前後（複数の地震が連続する）	5%程度	10%程度	20%程度	—	約206年 —
	茨城県沖		6.9～7.6	30%程度	70%程度	90%程度	—	約25.6年 —
	繰り返し発生するプレート間地震		6.7～7.2	0.06%～0.6%	90%程度以上	90%程度以上	0.08	約21.9年 1.8年前
	房総沖 <sup>(注7)</sup>		—	—	—	—	—	—
太平洋プレート内 <sup>(注7)</sup>		—	—	—	—	—	—	

領域または地震名		長期評価で予想した地震規模 (マグニチュード)		地震発生確率 <sup>(注1)</sup>			地震後経過率 <sup>(注2)</sup>	平均発生間隔 <sup>(注1)</sup> (上段)	
				10年以内	30年以内	50年以内		最新発生時期 (下段：ポアソン過程を適用したものを除く)	
千島海溝沿いの地震 (第二版)	十勝沖	8.1前後	連動 8.3程度	ほぼ0%	0.7%~4%	20%~30%	0.13	72.2年 <sup>(注9)</sup> 9.3年前	
	根室沖	7.9程度		6%~10%	50%程度	80%程度	0.55	72.2年 <sup>(注9)</sup> 39.5年前	
	色丹島沖	7.8前後 (Mw8.2前後) <sup>(注10)</sup>		10%~20%	60%程度	80%~90%	0.60	72.2年 <sup>(注9)</sup> 43.4年前	
	択捉島沖	8.1前後 (Mw8.5前後) <sup>(注10)</sup>		20%程度	60%~70%	90%程度	0.68	72.2年 <sup>(注9)</sup> 49.2年前	
	ひとまわり小さいプレート間地震	十勝沖・根室沖	7.1前後		40%程度	80%程度	90%程度	—	17.5年 —
		色丹島沖・択捉島沖	7.1程度 (Mw7.7程度) <sup>(注10)</sup>		60%程度	90%程度	90%程度以上	—	10.5年 —
	沈み込んだプレート内のやや浅い地震		8.2前後		10%程度	30%程度	50%程度	—	82.8年 —
	沈み込んだプレート内のやや深い地震		7.5程度		30%程度	70%程度	80%程度	—	27.3年 —
日本海東縁部の地震	北海道北西沖の地震		7.8程度	0.002%~0.04%	0.006%~0.1%	0.01%~0.2%	0.54	3900年程度 約2100年前	
	北海道西方沖の地震		7.5前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.02-0.05	1400~3900年程度 72.4年前	
	北海道南西沖の地震		7.8前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.01-0.04	500~1400年程度 19.5年前	
	青森県西方沖の地震		7.7前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.02-0.06	500~1400年程度 29.6年前	
	秋田県沖の地震		7.5程度	1%程度以下	3%程度以下	5%程度以下	—	1000年程度以上 —	
	山形県沖の地震		7.7前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.18以下	1000年程度以上 179.1年前	
	新潟県北部沖の地震		7.5前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05以下	1000年程度以上 48.5年前	
	佐渡島北方沖の地震		7.8程度	1%~2%	3%~6%	5%~10%	—	500~1000年程度 —	
日向灘および南西諸島海溝周辺の地震	安芸灘~伊予灘~豊後水道のプレート内地震		6.7~7.4	10%程度	40%程度	50%程度	—	約67年 —	
	日向灘のプレート間地震		7.6前後	5%程度	10%程度	20%程度	—	約200年 —	
	日向灘のひとまわり小さいプレート間地震		7.1前後	30%~40%	70%~80%	80%~90%	—	約20~27年 —	
	南西諸島周辺の浅発地震 <sup>(注11)</sup>		—	—	—	—	—	— —	
	九州から南西諸島周辺のやや深発地震 <sup>(注11)</sup>		—	—	—	—	—	— —	
	与那国島周辺の地震		7.8程度	10%程度	30%程度	40%程度	—	約100年 —	
相模トラフ沿いの地震	大正型関東地震		7.9程度	ほぼ0%~0.2%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~8%	0.22-0.45	200~400年 89.3年前	
	元禄型関東地震 <sup>(注12)</sup>		8.1程度	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.13	2300年程度 309.0年前	
	その他の南関東のM7程度の地震		6.7~7.2程度	30%程度	70%程度	90%程度	—	23.8年 —	

上記表中、「ほぼ0%」とあるのは、 $10^{-3}$ %未満の確率値を表す。

- 注1：これらの評価は、基準日を元に更新過程を適用。また、三陸沖北部から房総沖の海溝寄りの地震、三陸沖北部のひとまわり規模の小さい地震、福島県沖の地震、千島海溝沿いのひとまわり規模の小さい地震および沈み込んだプレート内の地震、日本海東縁部の秋田県沖の地震、佐渡島北方沖の地震、日向灘および南西諸島海溝周辺の地震、相模トラフ沿いのその他の南関東のM7程度の地震については、ポアソン過程を適用。
- 注2：最新発生時期から評価時点までの経過時間を、平均発生間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均発生間隔に達すると1.0となる。
- 注3：時間予測モデルに基づいて推定。
- 注4：平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震に伴い、地震発生確率が表の値より高くなっている可能性がある。
- 注5：東北地方太平洋沖地震の震源域に含まれる三陸沖中部から三陸沖南部海溝寄りの沖合に至る部分については、この地震によりこれまでの歪を解放した状態と考えられる。そのため、この部分の将来の地震発生確率は表中の値よりも小さいと考えられる。
- 注6：Mtは津波の高さから求める地震の規模である。Mt8.6および9.0の値は、阿部(2003)の1896年明治三陸地震のMtを採用した。阿部勝征, 2003, 津波地震とは何か?, 月刊地球, vol. 25, No. 5, 337-342.
- 注7：三陸沖中部、房総沖は対象となる被害地震がないため確率の評価を行っていない。太平洋プレート内の地震はデータ期間が14年間と短く1997年より過去のデータについては不明のため確率の評価を行っていない。
- 注8：余効変動が依然として継続しており、アスペリティの固着が確認できないため確率は算出できない。
- 注9：千島海溝沿いの区分けした各領域でM8程度のプレート間地震が繰り返し発生するとし、それらの発生間隔はどの領域でもほぼ同程度と仮定した。そこで、各領域の地震発生間隔（十勝沖 108.9年及び51.6年、根室沖 79.2年、色丹島沖 76.2年、択捉島沖 45.1年）の違いをばらつきと見なし、それらの値の平均値72.2年が平均発生間隔を近似するものとした。
- 注10：過去の地震のMとMwの差が大きいため、Mwも参考として示した。Mwは「モーメントマグニチュード」のことである。地震の規模を表すマグニチュード(M)は、観測点における地震波(地震動)の大きさ(揺れの大きさ)の分布を使って算出するのに対して、Mwは震源の物理的な規模を表す地震モーメントという量を使って算出するマグニチュードである。地震の震源域の規模を反映し、マグニチュードの頭打ち(地震が大きくてもマグニチュードはその割に大きくならない現象)を回避できるために、物理的な意味が明確な指標である。
- 注11：これらの領域については、地震発生の特性を明らかにするための十分な知見が得られていないことや、長大な設定領域において発生する場所を特定できないこと等により、対象となる地震の平均発生間隔などを評価しなかった。
- 注12：元禄型関東地震は、大正型関東地震の想定震源域が房総半島南沖～南東沖へ拡大・連動したタイプとしているので、ここでは大正型関東地震と元禄型関東地震の発生確率を互いに独立して扱うものとは考えていない。
- 注13：南海トラフで発生する地震のうち、東海地震については中央防災会議が国としての評価を「東海地震に関する専門調査会報告」(2001年)として公表しており、中央防災会議はこの報告の中で、東海地震がいつ発生してもおかしくないとしている。想定東海地震の震源域が単独で破壊した事例は知られていないため、過去の事例に基づいて発生間隔を推定するこれまでの長期評価の手法では発生確率を求めることはできない。しかし、地震調査研究推進本部では、確率的な地震動予測地図を作成するにあたり東海地震の発生確率が必要であるため、以下の方法で求めた。  
 ・平均活動間隔は「南海トラフの地震の長期評価」に想定東海地震の震源域の全域または一部地域が活動したと記載のある、明応東海地震(1498年)、慶長地震(1605年)、宝永地震(1707年)、安政東海地震(1854年)の4つの地震の発生間隔の平均値118.8年とした。  
 ・最新活動時期は1854年安政東海地震とした。  
 ・平均活動間隔のばらつきを表すパラメータは、長期評価が行われている東南海地震と同じ0.20を用いた。  
 ・隣接する地域と連動する場合と単独で発生する場合が同一の発生間隔であると仮定した。  
 東海地震は隣接する地域との連動性のメカニズムが未解明であるため、発生確率を求めるためには、上記のようないくつかの仮定を行う必要があった。したがって、長期評価結果として公表している他の海溝型地震の発生確率と同程度の信頼度はないことに留意する必要がある。

「全国地震動予測地図」報告書で用いた方法による想定東海地震の確率<sup>(注13)</sup>

地震名	想定地震規模	地震発生確率	平均発生間隔
	マグニチュード	30年以内	
東海地震	8程度	88%(参考値)	118.8年(参考値)

(参考) 2011年東北地方太平洋沖地震発生直前における確率

領域または地震名	発生した地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			地震後 経過率	平均発生間隔
		10年以内	30年以内	50年以内		最新発生時期
東北地方太平洋沖地震	9.0	4%~6%	10%~20%	20%~30%	0.83~1.00	600年程度 約500~600年前

(参考) 1995年兵庫県南部地震発生直前における確率

断層帯名	発生した地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率	地震後 経過率	平均活動間隔
		30年以内		
六甲・淡路島断層帯主部 淡路島西岸区間 「野島断層を含む区間」	7.3	0.02%~8%	0.5-1.2	1700年~3500年